公開セミナー報告

高 橋 源一郎

本学部付属研究所主催の「明治学院大学 2013 年度公開セミナー」は、「震災の後で――あの日の記憶を風化させないために――」と題し、11 月 12 日から 12 月 10 日にかけ、5 回にわたって開催された。そこでは、「3・11」以降、不気味に変質するこの社会に対して、わたしたちは、どのように、どんな道筋で考えればいいのか、ということについて、ゲストを招いて議論することとした。それぞれの回での応答を報告する。

第 1 回・11 月 12 日（火曜）

……第 1 回は「生活と未来を『発明』する」と題して、「発明家」の藤村靖之さんをお招きした。藤村さんは昭和 19 年（1944 年）に生まれた。藤村さんは、大学院を修了した後、小松製作所で研究者・技術者として活躍し、多くの特許をとったが、80 年代になって、自身の子どもがアレルギー喘息になったことをきっかけに、現代の技術に疑問を抱き、新しい技術の「発明」に邁進するようになった。その代表が、「非電化製品」だ。「非電化製品」とは、その名が示すように、電気を用いない（けれど、もともとは電気を用いた）製品のことである。たとえば、冷蔵庫、除湿器、掃除機、換気装置、等々。とはいっても、昔のような「氷冷蔵庫」の類ではない。藤村さんは「対流」と「放射熱」という、誰もが知っている物理の原理を用いて、いっさい電気を使わない冷蔵庫を作った。そして、藤村さんは、ただ非電化製品を作るだけではなく、それを社会の変革のために活用することも求めた。非電化冷蔵庫は、安価に生産できる。それ故、モンゴルのように（冷蔵することによって肉を失わないですむ）、貧しい国でも、作ることができたのである。また、この製品を特許化せず、いわば「著作権フリー」で公開している。発明は、「みんなの共有物」であると考えているからだ。そんな藤村さんと、原発事故以降の社会のあり方、とりわけ、「電気」を巡る考え方について話した。

第 2 回・11 月 19 日（火曜）

……第 2 回は「国際紛争と日本の選択」と題して、東京外国語大学教授の伊勢崎賢治さんをお招きした。伊勢崎さんは昭和 32 年（1957 年）生まれだが、まず早稲田大学の建築科を卒業した後、ボンベイ大学の社会科学研究科で博士前期課程修了という異色の経歴の持ち主だ。その後も、国連に勤務し「国連東ティモール暫定統治機構上級民政官」「国連シエラレオネ派遣団上級顧問」を歴任した。アフガニスタンでも同様の仕事をしている。伊勢崎さんは、日本人として、前例のない、紛争地での平和構築に関する実務を担当し続けた。直前まで戦っていたグループの武装を解除し、平和裡に秩序を回復させていく難しい仕事だ。「平和」に関する理論や論議が、時に抽象的になるのに対し、誰よりも深く現実を知る伊勢崎さんの話はきわめて説得力があった。その

伊勢崎さんは、憲法 9 条の下、戦後 70 年近く、平和であり続けてきた日本だからこそ、紛争解決に関して力になることができるのだ、とおっしゃった。「特定秘密保護法」が作られ、「集団的自衛権」の行使が既定のものとなりつつある現在、伊勢崎さんの経験と考え方は、わたしたちにとって大きな力になるものだった。

第 3 回・11 月 26 日（火曜）

……第 3 回は「真の『自由教育』とは」と題して、教育学者であり教育実践者である堀真一郎さんをお招きした。堀さんは昭和 18 年（1943 年）に生まれた。京都大学教育学部を卒業し、その後、大阪市立大学教授となった。新しい教育の一つのスタイルを作り上げた A・S・ニイルの影響を受け、「ニイル研究会」を立ち上げ、やがて、ニイルのサマーヒル・スクールを範として、1992 年、和歌山県橋本市に「きのくに子どもの村小学校」を開校した。いま、「きのくに子どもの村学園」の下に、それぞれ 4 つの小学校・中学校、そして 1 つの高等専修学校がある。ここで行われている教育は、独特のものだ。その一つは、試験がないこと。一つは、成績表がないこと。一つは、学年で分けられたクラスがないこと。一つは、宿題がないこと。一つは、「プロジェクト」という名の、実践的な授業（たとえば、木工でなにかを作る、あるいは、料理をする）が中心であること。一つは、「先生」「生徒」という名称はなく、それぞれ「おとな」「子ども」と呼ばれ、お互いの名前や愛称を呼ぶこと。一つは、この学校の決め事は、「おとな」「子ども」が全員参加するミーティングで決定され、年齢に関係なく平等な 1 票を持つこと、等々である。これらすべてが、現在行われている教育とは遠く隔たっていることは明らかだろう。大学よりも、原理的な教育が行われている場所の主宰者との対話はきわめて刺激的だった。

第 4 回・12 月 3 日（火曜）

……第 4 回は「体験・記憶・風化」と題して、気鋭の社会学者である古市憲寿さんをお招きした。古市さんは昭和 60 年（1985 年）に生まれ、慶応大学環境情報学部を卒業し、東京大学修士課程を修了した。現在も同大学博士課程に在籍し、同時に慶応大学の研究員も兼ねている。古市さんはまず最初の単著『希望難民ご一行様』で、若者たちが乗って、平和について学びながら世界を航海するピースボートに、自ら乗って研究し、現在の若者たちの内側にまで入りこんでみせた。それ以降も、『絶望の国の幸福な若者たち』、『ぼくたちの前途』、『誰も戦争を教えてくれなかった』等の本で、自分も所属している「若者」たちに深く切りこんでいった。古市さんが提出する「若者」像は、彼よりも年上の研究者たちが教えたくれるものや常識とは大きく異なっていた。ひとことでいうなら、貧困の度合いを深めながらも、同時に、若者たちは、彼らの境遇や現状を「幸福」なものとして受けとろうとしていたのである。政府の様々な委員会に属し、またテレビ等へも数多く出演しながら、左右もしくは体制・反体制といった枠組みからも離れて、自由な立場で発言する古市さんのことばは、参加者に複雑な反応を呼び起こしたと思う。

第 5 回・12 月 10 日（火曜）

……第 5 回は「震災以降の文学」と題して、作家の川上未映子さんをお招きした。川上さんは、

昭和 51 年（1976 年）に生まれた。2002 年には川上三枝子名義で、歌手デビュー、その後も「未映子」と改名して、音楽活動を続けた。雑誌「ユリイカ」に詩が掲載されて注目を浴び、2007 年に最初の小説「わたくし率 イン 葉――、または世界」を「早稲田文学」に発表、同時に芥川賞の候補になった。2008 年、「乳と卵」で芥川賞を受賞。その後も、詩集『先端で、さすわ ささるわ そらええわ』で中原中也賞、小説『ヘヴン』で芸術選奨新人賞、『愛の夢とか』で谷崎潤一郎賞、さらに、出演した映画でもキネマ旬報新人女優賞を受賞するなど、現在もっとも多方面で活躍する作家といえるだろう。その川上さんの『愛の夢とか』におさめられた短編の多くは、「3・11」の直後から書かれ、その影響を感じさせる。第二次大戦中、ほとんどの作家が、沈黙を守り、または沈黙を強いられる中で、太宰治は傑作を書き続けた。作家は、時代の空気を誰よりも感じ、同時に、その空気に流される人びとを凝視する能力を求められる。その代表が太宰治だったが、川上さんにも同じものが感じられる。川上さんの、とげとげしい空気の中で、どのようなことばを送り出せるかについての静かな返答が印象的だった。